

報告

全学共通教育 FD 講演会・討論会～プロの講談師・落語家との討論～ —2009 年度全学共通教育センター一部局 FD 事業実施報告—

堤 和博
(徳島大学全学共通教育センター)

(キーワード：話芸、講義、連続もの)

A Report on the Lecture and Forum with Professional Kodanshi and Rakugoka

KAZUHIRO TSUTSUMI
(Center For General Education, The University of Tokushima)

(Key words: the narrative arts, lecture, serials)

1. はじめに (主旨)

2009 年度全学共通教育センターの一部局 FD 事業は、プロの上方講談師・落語家を各一名ずつ招き、講演会並びに本学教職員との討論会を行った。これには、全学共通教育センター「質の高い大学教育推進プログラム地域社会人ボランティアを活用した教養教育」に参加されている社会人の方々にも参加いただいた。

従来のような講演会は、高等教育の専門家を招いて行われることが多かったかと思うが、本 FD 事業では話芸のプロお二人を招いて「語り」をテーマに講演していただいた。大学における講義も、教員の「語り」が主要な部分を占めるのは確かであろうから、「語り」を生業とされている方から吸収すべき点を大いに学び取ろうというのが主たる目的である。しかし、演芸の場における「語り」の技法等をそのまま全部講義に適用するわけにもいかないであろう。よって、二人の講演から大学教員が参考にできることは何か、また、反対に適用してはならないことは何か、講師のお二人も交えての参加者での討論も企画したものである。

今回講演をお願いしたお二人はともに四年制国立大学の卒業生で、5月7日に全学共通教育の教養科目の講義を参観して貰っている。自分たちが実際に受けた講義との比較など、色々な観点からの提言がなされ、活発な討論が行われた。

本報告は、お二人の講演の内容の主要部分の報告である。報告者の感想も述べたい気持ちもある

のだが、今回は報告にとどめる。ただ、報告者が講演会・討論会に参加して(討論会では司会を務めた)特に注意すべきと思ったり、強調しておきたかったところには下線を引いておいた。この下線部分に特に留意するかどうかも含めて、本報告を読んで各々の今後の活動に活かされることを期待するものである。

実施の概略は以下の通りである。

実施日時	2009 年 8 月 6 日	
	14 時 30 分～16 時 30 分	講演会
	16 時 30 分～18 時 30 分	討論会
実施場所	4 号館 201 教室	
講師	上方落語家 <small>はやしやそめざ</small> 林家染左 氏	
	上方講談師 <small>きよくどうなんかい</small> 旭堂南海 氏	
参加人数	本学教職員	39 名
	社会人	3 名 計 42 名

2. 林家染左氏の講演 (写真 1)

2-1 林家染左氏の略歴及び主な活動

略歴

- 1971 年 兵庫県宝塚市生まれ
- 1994 年 大阪大学文学部史学科日本史専攻卒業
- 同年 大阪府泉佐野市に学芸員として採用され、郷土資料館(歴史館いづみさの)開設準備にあたる。
- 1996 年 同市を退職
- 四代目林家染丸師匠に入門
- 2007 年 第 44 回なにわ藝術祭(産経新聞社など

主催) 落語部門新人賞受賞

主な活動

郷土資料館の学芸員であった経歴を活かし、実感に基づいた古典の表現を現代に活かせればと努力を続けている。寄席囃子に不可欠な太鼓・笛なども身につけ、日本舞踊の稽古にもはげみ、芸の幅を拡げている最中。自身で主宰する落語会も精力的に開催している。また、小・中・高等学校において、総合学習や国語科での特別講師を務めている。



写真 1

2-2 林家染左氏の講演内容

2-2-1 「^{なま}生」の大切さ

父が物理学者、母が英文学者でともに大学に勤めており、幼少期から少年期には夕食の時刻になっても父母が論文を書いていたりと夕食の用意がなされないで待たされたこともよくあり、大学教員にはよい印象を持っていない。それはともかく、幼少の頃から落語好きであった。普段はテレビなどのメディアを通じて落語に接していたが、ある時公開講演会に連れて行って貰い、^{なま}生で落語を聞いた経験がやはり印象に残っている。その経験から情報について考えるに、メディアを通じて情報を得たとしても、それは、知っている気になっただけのことで、本当に知ったこととは違うのだと、思うようになった。その思いは自ら演じる側となった今も生きている。

2006年9月に天満天神繁昌亭がオープンし、お客に生の落語を提供する機会が増えたが、繁昌亭

ではインターネット配信も同時に行っている。それで、連日同じネタを披露すると、インターネット配信で観ている人からは苦情が寄せられたりする。しかし寄席には元来毎日違うお客が来るものだから、同じネタを連日演じることも当然ある。しかし、同じネタでもその日その日の客層などを見て、毎日微妙に演じ分けている。お客の顔を見て演じ分けるのである。そんな寄席に毎日のように通ってくるお客もいるが、そんな人は、毎日同じネタを観ても日によって変わる微妙な演じ分けを楽しんでいるようだ。生だとその演じ分けが伝わるのだが、インターネット配信では難しいのではないか。

2-2-2 共通教育の講義を参観して

次に、5月7日に全学共通教育の教養科目の講義を参観した上で、自身の経験も踏まえての感想と提言である。

講義を参観してまず、自身が大学在学中に受けた講義とは違い、パワーポイントなどのプレゼンテーションの設備が進歩し、それを駆使した講義が多いのに驚かされた。配布物も色々工夫されたもの(具体的には省略)が多く、自身が受けた講義とは大いに違っていた。

このような工夫は、受講生に言わば食いついて貰うにはいいかもしれないが、同時に受講生を受け身にさせるものではないか。また、工夫すればするほど分かり易い講義になるであろうが、一方で、分かりにくい講義であってもそれを聞き取って理解する能力を育成することを阻害していることにはなりはしないか。プレゼンテーションなどの準備なしで理解をさせる講義も一方では必要だと感じる。

いずれにせよ、いかに受講生に分かって貰うかが肝腎であるには違いなく、それにはともかく何を伝えたいかが明確でないといけない。それは、林家染左師匠が某私立大学で日本伝統芸能論を講じるのを手伝ったり、自らも大阪市立東住吉高等学校芸能文化科で教えている経験からすると、学問がいかに面白いかということにつける。そしてそれは即ち次世代に伝えたい面白い学問ということになる。

もう少し大学に特化して言うと、大学では自分の好きなことを学ぶのであり、それ以外のことは知識を拓げるために学ぶわけである。知識を拓げる際には、知識と知識の横の繋がりが重要である。

また、小学生ぐらいだと知識が少ない、即ち、何を聞いてもイメージがわきにくいので、そこでイメージがわくように工夫してあげると何にでも興味を示すが、年齢が上がるにつれ何にでも興味を示すというわけにはいなくなってくる。加えて、色々な先入観も持っているので、まず先入観から取り払わないと興味を引きつけるのが難しい。

何を伝えたいか明確にするとと言っても、これらの点も留意しておく必要がある。

加えて、学芸員時代の経験に基づく提言もなされた。

学芸員時代にも講演や展示解説等をするのがあったが、いずれの場合も、何か見せる物（展示物）があって、それを「芯」にして視点や切り口を変えながら、言わば「補足」すればよかった。大学での講義等では、「芯」から明確に提示する必要がある。

2-2-3 「語り」の技術・留意点

続いて、講義に限らず、人前で話をする際の留意点等が、プロの咄家の視点から述べられた。

まず、話し方のトーン・声の大小・緩急（息・間）が大切である。

落語を演じる際、登場人物の台詞の部分でトーンを変えるのは当然だが、地の文のところでもトーンを変えている。普通に喋る時にも、とにかく、一本調子にならないことは重要である。声も場合によって大小使い分けが必要だが、そのためには大きな声を出せるように鍛錬しておかなくてはならない。大きな声が出せれば小さな声を出せるが、その逆が成り立たないのは言うまでもないことだからである。緩急（息・間）では特に、隙間にいない音（「あ〜」とか、「その〜」とか、「え〜」とか）を入れない方がいい。言葉に詰まった時などにそんな音を入れるぐらいなら、その間黙った方が効果的である。

上の事柄とも関連して比較的簡単に注意できる

点を挙げると、口を大きく開けてゆっくり話すように心掛けるとよい。自然と聞き取り易い発音ではきはき話しているように聞こえ、間も適当に取れるようになり、一本調子にもなりにくい。早口になるとどうしても間を入れることに気がいってしまう。

その他では、無意味に体や手を動かさないように気をつけなければならない。聞く方がその動きに気を取られるからである。体を動かすのは、何かをアピールするためとか、身振りで何かを示すためとかの時に限るのがよい。

2-2-4 落語家になる決心

幼少の頃から落語好きで、大学では落語研究会にも所属してプロの道にも憧れていたのだが、それが一旦学芸員となってから改めて師匠の門を叩くに至った経緯が最後に述べられた。この経緯も色々な面で参考になる話であったが、本FD事業の主旨とは若干ずれるので、詳しくは省略する。

ただ、一点だけ触れておきたいのは、プロになろうという決心がついた直接の切っ掛けである。それは、阪神大震災の被災者に生で落語を聞いて貰った経験（素人のボランティアとして）、演じる自分も嬉しく思えたし、聞いている被災者にも喜んで貰えた経験である。このエピソードから、**2-2-1**で強調された「生」の大切さが再認識された。

3. 旭堂南海氏の講演（写真2）

3-1 旭堂南海氏の略歴及び主な活動略歴

1964年 兵庫県加古川市生まれ
1989年 三代目（先代）旭堂南陵師匠に入門
同年 大阪大学文学部文学科国文学専攻卒業
1997年 咲くやこの花賞⁽¹⁾（大衆芸能部門）受賞

主な活動

毎月、一人続き読み会「旭堂南海の何回続く会？」を開催中（2010年1月で150回）。古典を中心に、長い講談の物語を続き読むのを得意とする。ネタは「太閤記」「難波戦記」「浪花侠客傳」「天満宮靈験記」など。



写真2

3-2 旭堂南海氏の講演内容

3-2-1 「講釈」・「講談」の説明

講談は古くは講釈と言ひ、講釈師が例えば『太平記』などのテキストを持ち、語句の解説や解釈などを講義に近い形式で聴衆に聞かせるものであった。その解釈・講義がテキスト化され、それを読むのが中心である。講談師が師匠ではなく先生と呼ばれたり、講談を語るではなくて読むと今でも言うのはこの名残でもある。

さて、この講釈が物語化していき、講談と呼ばれるようになって今日の形に近づいていったのであるが、それも当初は、例えば『太閤記』『忠臣蔵』などの長編を続きものとして何日もかけて読む形式が主流だった。娯楽の少なかった時代には、町々に講談をかける小屋があり、そこで一人の講談師が何ヶ月もかけて連日続きものの講談を読んだのである。講談好きのお客も多く、中には「講釈場いらぬ親父の捨て所」の川柳に示されているように、家人に邪魔者扱いされて来る人もあり、とにかく賑わっていたと言う。今日このような小屋はほとんど姿を消し⁽²⁾、講談が演じられるのは講談の会を中心に、あるいは落語会の合間などばかりとなった。いずれにせよ、一日限りの会がほとんどで、連日に亘って続きものを読むことはすっかりなくなってしまった。

3-2-2 続きものを聞かせる

さて、略歴の欄にもある通り、南海氏が「旭堂南海の何回続く会？」を個人的に催し、長い講談の物語を続き読むのを得意とするというのは、講談古来の続きものを読む形を目指そうとする意図からきている。以下、主として連日に亘って続きものを聞かせる講談の特性を念頭において講演がなされた。

連日続きものを演じる場においては、何よりお客に心地よい気持ちを与えることが大切となる。「明日もまた聞かなければ」という気持ちを起こさせなければならないからである。加えて、講談の場合は歴史を胤にした虚構の物語であるから、心地よく騙された気分になれることが肝腎である。古句「騙されて心地よく咲く室の梅」が詠まれたエピソードも紹介された。

翌日の来場の動機づけを行うには、どこで切って明日に廻すか、最後の3分、極端には1分のところが大変重要となる。この一日の終わりのところを「切れ場」というのであるが、どこを切れ場にするかで講談師の力量が測られた程であった。分かり易い例で言えば、事件が解決してもそこで終了とはせず、また「大変だあ、大変だあ」と言いながら誰かが向こうから駆けてくるところで「つづく」となる韓国の連続ドラマの手法に近いものがある。

続きもの全体を見渡すと、天王山と称せられたりするクライマックスの回もあれば、天王山に至るために語っておかなければならないがその話自体は面白くはない話をする回もある。天王山が山場なら谷間の回も必要なのであるが、その谷間の回で重要なのは、天王山に至った時、この谷間の内容がいかにか生きてくるかを小出しにしておくことである。この面白くなさそうな谷間の話をしっかりと聞いておけば、後に待ち構えている天王山がより面白く聞けますよと伝えるテクニックである。

さらには、本筋とは大凡関係なさそうなことをわざと長々と話す場合もある。例えば、千利休の物語で秀吉の命で切腹する場面がクライマックスだとすると、それに至るまでに茶杓の話や長々としたりするるのである。それも、利休が使う茶杓に

直接関係する話ではなく、茶杓の由来がどのとか、材料がどのとか、一番上等の茶杓がどのとかの話である。聞いている方からすれば、なぜこのような話がここで長々と語られるか最初は分からないかもしれないが、最後まで聞き終わった時、利休の切腹と茶杓の話の繋げて解釈したりするのである。

また、天王山に入りそうでなかなか入らないテクニックもある。つまり、「いよいよ明日は天王山とあいなります」と言って終えておきながら、翌日になると「今晚からはいよいよ天王山に入るやに昨晚は申しましたが、その前にまだ語っておかなければならぬことがあるのでござりまする。これをお聞きいただかなければ……」とか言って話を接ぎ、天王山を先延ばしにするのである。

天王山に入っても勿論注意がいる。それは、盛り上げておいてストーンと落とすのである。言い換えれば盛り上がりを長々とは引きずらないことが肝腎である。

その他、毎日来ている常連のお客と途中の日に初めて来たお客が混在するのも注意を払う必要がある。つまり、前回までのお客には必要ないが初めてのお客には必要であり、お客をすれば常連はだれるし、しなければ初めてのお客が話についてこられない。いずれにしても明日以降来なくなる恐れがある。それで、イントロダクションのところでお客をしつつ、そこに常連にも今まで聞かせていなかった内容を差し挟んだりするのである。

さて、以上のようなことは、**2-2-1**で一言したように、すべてお客の顔を見てから臨機応変の対応でどうするかが決められる。常連が多いのか、初回の客が多いのか、また、顔ぶれは大きく変わってなくても、客の方でものってきているのか、だれてきているのかなどを見てどうするか判断するのである。そういうことからすると、連続で15、6回の講義が行われる大学においては事前にきっちりとしたシラバスが用意されているが、そんなことは講談ではあり得ない。ましてや事前の計画通りに進めていくことなどはあり得ないのである。

下の写真3は、講演中の南海氏とそれを聞く参加者の様子である。



写真3

4. おわりに

染左氏の講演は我々に参考になることを直接話して聞かせて下さった部分が多かった。一方の南海氏の講演ではそのような部分は少なかったようにも思うが、本文を読んでいただいてお分かりかと思うが、直接以上のインパクトで我々に伝わってくるものが多々あった。報告者が下線を引かなかったところも含めて、御両所の講演内容を銘々で今後の参考に資していただきたく思う。

さて、この後討論会が行われた。そこでは、共通教育の教養科目における問題のみならず、大学院ヘルスバイオサイエンス研究部の複数の教員からは、日進月歩の医学界で通用する医師を養成する医学教育の問題点までも提示され、さらには、社会人の方からは、博物館のボランティア活動で小学生に説明する際の心掛けなども述べられ、予想以上の幅広い論議がなされた。

下の写真4は討論会中に大学院ヘルスバイオサイエンス研究部の教員が発言しているところである。



写真4

討論会における具体的内容は概ね割愛するが、一点だけ述べておく。お二人とも、何割ぐらいのお客を実際の相手とするかということに触れられた。特にお客が多い場合、10割のお客の満足を目指すとは必ず失敗する、そもそもそんなことは不可能だと言うのである。よって、全員に満足を与えることは目指さず、5割強かせいぜい6割方のお客に満足して貰えればよしとするのがよい。その方がよい芸を披露できる。はたしてこれは大学教育の場にも適用してもよいことであろうか。

下の写真5は討論会中に染左氏が発言しているところである。



写真5

(注)

(1) 大阪市のホームページ

(www.city.osaka.lg.jp/yutoritomidori/page/0000009253.html)によると、1983年度から大阪市が設けている賞で、創造的で奨励に値する芸術文化活動を通じて、大阪文化の振興に貢献し、かつ将来の大阪文化を担うべき人材(個人または団体)に対し、一層の飛躍の期待を込めて贈られるものである。概ね40歳以下の方が対象とされ、「音楽」「美術」「演劇・舞踊」「大衆芸能」「文芸その他」の5部門に分かれている。

(2) 落語「くしゃみ講釈」に往年の講釈小屋の様子が描かれている。なお、「くしゃみ講釈」では講談師後藤一山が客席の最前列で唐辛子を燻べられてくしゃみが連発して講釈が続けられなくなるのだが、その後日談を描いた講談「後藤一山の逆襲」を南海氏が創作している。

【付言】

本FD事業は、FD専門委員会の承認を得て全学共通教育センターに配分された平成21年度部局FD事業実施予算を使って開催した。報告者は、全学共通教育センターFD教育方法部会長として、本事業を取り仕切ったものである。